北海之光

11月号 北海道教区報

どのような道を歩むときにも主を知れ
主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる
箴言３章６節

発行所 北海の光社
001-0015 札幌市北区北15条西５丁目1-12
日本聖公会北海道教区事務所
電話 011－717－8181
ＦＡＸ 011－736－8377
E-mail:hikari@nskk-hokkaido.jp
http://www.nskk-hokkaido.jp
発行人 笹森田鶴

「異種家族」との別れ

札幌キリスト教会牧師
岩見沢聖十字教会管理牧師
小樽聖公会協働司祭
司祭 クリストファー 永谷 亮

今年の三月二一日、愛犬の「クーマ」（犬種／トイプードル）が一八歳五ヶ月で亡くなりました。今年に入ってからは歩くのも難しくなりトイレはおむつを使い始めました。大好きな散歩は抱っこで。亡くなる前日、急に無駄吠えが始まりました。飲み水を近づけるとかろうじて少し飲んでくれましたが、食事も摂らなくなってしまいました。その日は春分の日だったので翌日の朝に病院に連れて行こうと思っていたのですが、朝七時前に息を引き取りました。

思い出すだけで今でも胸が苦しくなります。

クーマの死を悼みながら、小さな棺をつくって亡骸を横たえ、リビングにメモリアルコーナーを用意して、クーマの写真や好物を並べたりしました。生前にかわいがってくれたり、気にかけてくれたりしてくださった方々に連絡を差し上げると、笹森主教様もお別れのために駆けつけてくださり、お祈りをしてくださいました。また多くの方も来てくださり、悲しみを分かち合い、慰めてくださいました。その後、移動式の火葬車に来てもらい、クーマのお骨は小さな骨壺に収められています。

あえて「ペット」という言葉を使わせていただきますが、その命に責任を持ちながらペットと一緒に暮らしていると、言葉に依らずとも、顔の表情やしぐさ、声のトーンでコミュニケーションを交わすことができます。性格や好き嫌いもある「家族」であることが当たり前の大切な存在として一緒に生きていくのです。

ペットの死は、神さまに造られた命との別れであり、家族の喪失と悲しみであることには変わりありません。二年前に逝去された関田寛雄さんは『「断片の神学」実践神学の諸問題』において、ペットは「創造者なる神との契約に基づく、いわば『盟友』」であり、「人間とは『種』を異にするものでありながらも、ある決断を持って共生し同居するのであれば、それを『異種パートナー』または『異種家族』と称するのが相応しいのではあるまいか」と述べています。そして異種家族の死について、「愛するものを失った者の悲しみの癒しは先ずその死に直面する事から始まるのは、人間の場合と全く同様である。当事者でなければ分からないその悲しみはその現実を直視すると共に、一緒に悲しむ者の存在が癒しに大きく貢献する。慰めは悲しむ者同士の間から始まる」と、異種家族の死に向き合う人の慰めと癒しのプロセスを示します。

教会では一般的にペットの葬儀は行われませんが、これにはペットへの偏見や伝統的なキリスト教の動物観があるからではないかと関田寛雄さんも指摘されています。その上で「動物の生命の尊厳を人の生命の重要性と共に記念すると共に、飼い主の悲嘆への『牧会的配慮』の務めがなされるべき」と述べています。

私も実際、異種家族とのお別れのお祈りをいくつも経験しています。いわゆる「ペットロス」に苦しむ方も少なくありません。

今、異種家族と生活されている方がもしその家族とお別れをしなければいけないとき、ぜひ牧師にお知らせください。同じ悲嘆を経験した、また一緒に悲しんでくれる仲間もたくさんいます。愛する家族と共に暮らし、心を通い合わせる喜びを与えられたこと、かけがえのない祝福と恵みが与えられたことを感謝し、神さまのみ手のなかで安らかであるように祈り、家族を失った人にいつくしみと、慰めを一緒に祈りましょう。